

書王定國所藏烟江疊嶂圖

王定國の蔵する所の「煙江疊嶂圖」に書す

江上愁心千疊山
浮空積翠如雲煙
山耶雲耶遠莫知
煙空雲散山依然

江上の愁心 千疊の山
空に浮べる積翠 雲煙の如し
山か 雲か 遠うして知る莫し
煙空しく 雲散じて 山は依然たり

【語釈】○元祐三年（一〇八八）五十三歳の作。○王定國、定國は王鞏の字。真宗の世の宰相王旦の孫で、蘇軾の父の代からの友張方平（一〇〇七〜一〇九一）の婿であった。詩人であるが、蘇軾について文（公文書など）を学んだ。のち蘇軾が罪をえて投獄されたとき、王鞏も連坐して官をおとされたことがある。このとき王鞏は徐州へ来て十日ほど滞留し都へ帰った。王鞏は前年に揚州（江蘇省）の通判（副知事）に任ぜられたが、この年、都に帰っていた（査慎行の説）。○煙江疊嶂図 煙江は霧がかかっている川。疊嶂は屏風のようつらなる山々。○作者の原注にいう、「王晉卿が画なり」。晉卿はあざなで名は誥 太原（山西省）の人。宋初の功臣王全斌の玄孫。神宗皇帝の姉妹である蜀国公主の婿に選ばれたので、駙馬都尉の官をえた。詩人であり画家でもあった。蘇軾とは交りふかく、贈答の詩も多い。この詩は「古文真宝」に収められ、わが国でもよく知られていた。

○江上愁心 この四字は下の千疊山を修飾する。山は長江のほとりにあり、そしてそこにたたずむ人の心をうれえしめる。なお唐の張説（六六七〜七三〇）に「江上愁心の賦」〔唐文粹〕巻九と題する韻文がある。この蘇軾の詩の前半の構想は明らかに張説の賦からヒントを得ている。○千疊山 何百となくかさなりあった山々。○積翠 翠はみどり色。積はその濃厚をいう。○雲煙 このような場合、煙はけむりに似た水気をいう。○莫知 誰にもわからない。○依然 もとのまま。○この詩は一韻到底の古詩であるが、便宜のため段落を分ける。

【解釈】

大川のほとり、愁をいだく心に映ずる、たたなわる山の数々よ。ふかいみどりの色は天空にうかんで、雲か煙かとも見える。山なのか、雲なのか、遠くてさだかに知れない。だが、煙は消え、雲がはれたのちも、山のすがたはかわらない。

但見兩崖蒼蒼暗絕谷
中有百道飛來泉
繁林絡石隱復見
下赴谷口爲奔川
川平山開林麓斷
小橋野店依山前
行人稍度喬木外
漁舟一葉江吞天

但だ見る 兩崖蒼蒼として 絶谷暗し
中に百道の飛來の泉有り
林を繁り 石に絡いて 隠れて復た見われ
下 谷口に赴きて 奔川と為る
川平らかに 山開けて 林麓は断え
小橋 野店 山前に依る
行人 稍く度る 喬木の外
漁舟 一葉 江 天を呑む

【語釈】

○但見 以下の風景に目がひきつけられることを表わす。○蒼蒼 この場合は黒ずんだ青さをいう。○暗絶谷 絶は絶境というときの絶と同じく、外界から断絶していることをいう。暗はその谷がぐらいこと。「絶谷を暗うす」とよんでもよい。○中有 中は谷の中に、谷あいに。○百道 道は河川・水流など、線条形の物を数える詞。○飛來 遠いところから飛んで來た意。杭州の靈隱寺のそばに飛來峰という巨岩があつて、天竺（インド）から飛んで來た山だとの伝説がある。これも天上界から落ちて來たきだというつもりであろうか。○繁林絡石 繁と絡とは類義語。まといつく、からむ。○奔川 いきおいよく流れる川。以上の四句は山にはさまれた谷川の景色。○川平 以下四句は川の流れがすっかり緩慢になり、川はばもひろくなった平野の景。○野店 詩に使われる店は、たいてい路傍の休憩所で、居酒屋またはたご屋の意らしい。宋以後の山水画の点景となつている酒旗（酒屋の看板）をたてた小さな一軒家がこれであろう。○依山前 依はよりそう、よりかかる。○行人 旅行者。○稍度 稍は少しずつの義。ここではたぶん旅行者についていう。度は越と同義の動詞。○江吞天 川のずっと向うの方では、空を川が呑みこもうとして

【解釈】と見ると、兩岸の絶壁が青黒く立ち、深い谷は昼なおくらく、そこに天上から落ちてくる百すじの滝。その水はうねうねと林をくぐり岩石をぬい見えがくれしつづ、谷の出口へ、ほとばしる急流となる。やがて山がひらけ、川も平らになって、ふもとの林も断ち切られた。山の前景には小さな橋と、ささやかな野中の酒屋。しかし高い木々のかなたには、ちらほらと、旅行者がこえてゆく。空と水のさかいめへ向ってゆく一葉のいさりぶね。

使君何從得此本
 點綴毫末分清妍
 不知人間何處有此境
 徑欲往買二頃田

使君 何從り此の本を得たる
 毫末を点綴して 清妍を分つ
 知らず 人間 何れの処にか此の境有る
 徑ちに往いて 二頃の田を買わんと欲す

【語釈】

○使君 使君は州の知事をいうのが本来の用法(一二ページ参照)。この画の所蔵者王鞏(王定国)はそのとき揚州の副知事であるから、知事に准ずる人として、かく呼んだのであろうか。ただし、画人の王詵(王晉卿)も登州の知事であったことがあるから、画いた人をさすと解することもできる。○何從 何は一字で何処を意味する場合がある。○得此本 これも二様に解し得る。蘇軾が詩を題した王詵の画そのものを此本というと解するのが一つ。それならば、この一句は王鞏が王詵の画を手に入れたことをいう。第二に、王詵の画の手本(わが国でいう粉本)と解することもできる。手本というのは古人の画にかぎらず、画のもとになる実景そのものでもよいし、或いはかんたんなスケッチでもよいわけである。とすると、この句は王詵が何をもとにしてこの画をかいたかの意となる。今しばらく第一説によって解する。○点綴 通常は構図の中心的主题をなす物のほかに、ちょっとした景物を添えて、図柄をひきたせること。ここでは、点々と処々につづりあわせてゆく意味と解せられる。○毫末 毫は細い毛。末はその末端。ここでは画筆の尖端をいう。○分清妍 妍は秀でた美しさ。分は分明にする、くっきりと描き出す意であろう。○人間 人の世。○此境 境はもともと田地の境界線、一区劃の義から、転じて周囲から区別された或る一角の義となり、境地・心境を意味する。ここでは精神的な意味はあまり無く、むしろ或る風景・景観に重点があるようである。○徑 真っすぐに、わきめもふらず。○往 そこへ向って行く。○二頃田 頃(けい)は面積の単位、六一四・四アール。二頃とは、戦国時代蘇秦の故事にあるごとく、一家の生計をささえるのに充分な広さの田地の意を有する。蘇秦は政界で権力をにぎったが、失脚し死刑される時、「我をして洛陽負郭(都市の近郊)の田二頃あらしめば、豈能く六国の相印(宰相のしるし)を佩びんや」と言ったと伝えられる(「史記」蘇秦伝)。

【解釈】

王君よ、君はどこからこの絵を手に入れたのか。毛すじより細い筆のあとにつきつきと見ごとに描き出された清くうるわしい景色。だが、人間世界の一体どこに、こんな場所があるのだろうか。僕はすぐにも出かけて行って二百畝ほどの田地を買っておきたいものだ。

君不見武昌樊口幽絕處

君見ずや 武昌・樊口の幽絶の処

東坡先生留五年

東坡先生 留まること五年なりしを

春風搖江天漠漠

春風 江を揺るがして 天は漠漠たり

暮雲卷雨山娟娟

暮雲 雨を巻いて 山は娟娟たり

丹楓翻鴉伴水宿

丹楓 鴉を翻えして 水宿に伴い

長松落雪驚醉眠

長松 雪を落して 醉眠を驚かしむ

【語釈】

○君不見 まあ見たまえの義。しかし詩語としては目前に在る物を指示するよりも、むしろ或る一般的な事、または直接そこに表示されていなかった物事へ読者の注意を向わせようとする辞である。従って、ここでことばは一転し、蘇軾自身の過去の経験語る。○武昌 今湖北省鄂城、県の旧名。現在の武漢市ではない。蘇軾が流されていた黄州から長江をへだてた対岸にある。○樊口 やはり黄州の対岸、鄂城に近い樊山という山のふもととの船つき場。このへんは、蘇軾の「武昌寒溪の西山寺に遊ぶ」詩（合注 卷二十）などによると丘陵がつづき、林があつて景色がよかつた。○東坡先生 余人ならぬこの私が。東坡とは蘇軾が黄州に流されてのち始めて自から号したのであるから、ここではその土地に対する愛着と追憶とを含み、また俗人（かれを苦しめた政治家その他）に対し自己を区別しようとする意味をもつ。そして先生とは本来他人からよぶ言い方なのだから、自称すると、自身を客観的にながめることであり、同時にいくぶんかおかしさをも含む。○留五年 蘇軾が黄州に在った期間をさす。元豊三年（一〇八〇）に到着し、七年四月に出発するまで、足かけ五年になる。○漠漠 いちめんいたれさがっているさま。○卷雨 卷は、ひろげた巻き物を端からだんだんまき入れて行くような動作をいう。席巻の卷。ここは雲が通りすぎたあと、雨が雲にまきこまれて行ってしまった意であろう。○娟娟 娟娟はあでやか、たおやか。本来は人（特に女性）の美を形容することば。○丹楓 楓はかえでに似た樹木。丹はその紅葉をいう。○翻鴉 翻はひらひらと飛ぶこと。鴉はからす。ここは実際には楓の木から、からすが飛んで来る状況であるが、ことばの上では次の句と同形で、楓が鴉をひらひらさせたという表現になっている。○伴水宿 宿は鳥が水辺にとまっていることに通常いう（唐の常建の「西山」の詩に、「沙辺雁鷺泊し、宿処 葦葭蔽う」）が、この水宿は水宿の人すなわち船中で一夜を明かす人を意味し、伴はからすがその水宿の人といっしょに（宿る）義である。○長松 せの高い松。○驚醉眠 醉は昼となつて本がある。いま宋本に従う。昼眠ならばひるねの夢を破るのであり、上の句の水宿が夜であるのに対する。しかし昼とも夜とも限定せず酔眠とある方がよいであろう。○以上春風以下の四句はたぶん春夏秋冬四季を一句ずつで表わし、すべて追憶の風景。

【解釈】

ところで君も知っているだろう、あの武昌と樊口のあたり、幽邃きわまりない土地に、かくいう私、東坡先生が五年のあいだとどまっていたことを。春風が長江をゆるがせるとき、そらは重たげにたれていたし、夕暮れの雲が雨をまきこんで通りすぎたあと、山はひとときわたおやかに見えた。色づいたかえでの木のまから、ひらひらと舞いおりたからすは、船で夜をあかす旅の伴侶。高い松の枝から、とつぜん落ちた雪は、酔いごこちの夢をやぶるものだった。

桃花流水在人世
 武陵豈必皆神仙
 江山清空我塵土
 雖有去路尋無緣
 還君此畫三歎息
 山中故人應有招我歸來篇

桃花とうか 流水りゅうすい 人世じんせい 在り
 武陵ぶりよう 豈あにかなら必みずなしも皆みな神仙しんせんならんや
 江山こうざんはせいこう清空 我われはじんど塵土
 去路きよろ有りと雖いえども 尋たずぬるに縁えん無し
 君きみに此この画えを還かえして 三みたび歎息たんそくす
 山中さんちゆうの故人こじん 応まさに我われを招まねく歸來きらいの篇へん有あるなるべし

【語釈】

○桃花流水在人世 この一句は唐の李白の「山中問答」の詩の「桃花 流水 窅然として去る。別に天地の人間に非る有り」との二句を取り上げたのである(二集「李白」上 四六ページ)。李白がうたった桃花流水の山中は、人間の世から遠くはなれた処に設定された。だが、それも大きな意味では此の世に在るはずだ、の意。○武陵 武陵は今の湖南省常德市附近(今も桃源県がある)。陶淵明の「桃花源記」に書かれている桃源、すなわち理想郷はこの附近にあったことになっている(一集、一海知義注「陶淵明」一四一ページ以下)。○豈必 ……とは限らない。○皆神仙 仙の字を偃と書く本もあるが同音同義。陶淵明の書きぶりは微妙で、「桃花源」の隠れざとの住民は仙人のようにも見えるが、また常人のようでもある。蘇軾はかれらは仙人ばかりではあるまいと言っているのである。○江山清空 江山は山と川。清空の空は現実世界のわずらわしさから解放され超越したありさまをいうであろう。○我塵土 三字は我在塵土の在を省略した言い方。七言詩の下三字には往々この類の省略法を用いる。○去路 そこへゆくみち。○尋無縁 たずぬるよすががない。縁は手がかり、きっかけ。尋無縁は無縁尋というのとほぼ同義で、下にあるべき尋の上に置いた句法。これも詩に多い文法である。○還君 この君は明らかに画の所蔵者たる王翬をさす。○山中故人 隠遁して山林でくらししている人。故人は友人。○応有 応は推測の辞。たぶん……しているだろう。……はずである。○招我帰來篇 この招は友人たちが山中へ来いと蘇軾を招くのである。宋代のこの詩の注釈者(王注は晉の左思(左太冲)の「招隱の詩」を引き、清の何焯の説(「合注」に引く)は、「楚辞」の「招隱士」篇を引く。しかし、この二つの作品は招の字を題に用いた前例にはなるが、ともに隠者が朝廷へ出るよう招くのが主旨であるから、この蘇軾の考えとは反対になる。つまり反用である。帰來篇の語も右の「招隱士」にある。やはり反用で、山中へもどれと言っているのである。昔の詩文の成語を反用することは蘇軾の詩では少なくない。

【解釈】

桃花流水と歌われたところ(それは李白が言うように別天地であろうか、いや、そうではなく)実はこの世のほかではない。武陵の桃源郷、そこに住んだ人々も、仙人ばかりでもなかったろう(ただの人もそこへ行けるはずなのだ)。こんな清らかな山水がありながら、僕は土ほこりの中でくらししている。そこへ行く路はある。だのに僕には機縁がめぐまれないのだ。君にこの画をかえそうとして、僕は三度めのためいきをつく。山中の友人たちは、多分、僕に帰って来いと詩篇を作ってくれていることだろうが。